

Title	台湾の家庭における道教の祭壇について : 二〇一〇年代の都市部・台湾南部の例を中心に
Author(s)	前川, 正名
Citation	中国研究集刊. 2017, 63, p. 229-243
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/70154">https://doi.org/10.18910/70154</a>
rights	
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 台湾の家庭における道教の祭壇について

——二〇一〇年代の都市部・台湾南部の例を中心に——

前川 正名

### 一、はじめに

台湾の民間における道教は、その宗教行事（儀礼）を行なう本人達（台湾人）においては「道教」としての意識が比較的低く、「民間信仰」という呼称を以って理解されていることが多い。その実態を示すように、各種宗教儀式のノウハウ集の類を見ると、題名に「民間信仰」の文字が冠されているものは多い。

また、学生に、「本人の宗教」を聞いてみると、キリスト教や仏教の信者の場合は、明確に答えるにもかかわらず、その他の学生は「特に何も信じていません」との答えを返してくる。そういった「自己申告では無宗教」

と答えた学生に対して、「家の宗教」を尋ねても明確な答えが返ってこないことが多い。

しかし、無宗教と答える学生達の実際の生活を聞いてみると、冠婚葬祭、特に葬式・法事等のいわゆる人生の最後に関する宗教行事は、外国人である私の目には、道教系としか映らない。本人の意思とは無関係に、成り行き（一族の都合）で道教系の信者層に組み込まれている、つまり消極的選択・非活動的ではあるものの、分類上は道教系信者であることには変わりがない（注）。

日本の例で言うならば、敬虔な信者は台湾と同じく少数派であると思われるものの、それにもかかわらず自分の家の葬式等の数々の宗教的な行事が仏教系か神道系かくらいは把握しているものである。これと比較するなら

ば、台湾では実際の道教的な宗教行為が多く残っているとされながらも、「民間信仰」の呼称からも分かるように、自分達が日常的に行なっている宗教的行為に対しては、宗教としての意識（何教なのかという意識）が希薄だということが出来るだろう。

さて、このような無関心さがあるにせよ、日本の神棚や仏壇、あるいは仏間に類するものは、道教においても存在するのであり、各家庭にも作られている。祭壇・祭台・神壇と呼ばれるものである。

ただし、近年、近代化に伴い住環境も著しく変化し、従来のような四合院形式の家屋は、減少の一途をたどっている<sup>(注2)</sup>。都市部に至っては、ほぼ壊滅しているといってもよい<sup>(注3)</sup>。そのため、昔ながらの祭壇を設けることは難しく、表面上は、消失しているかのような印象を受けることもある。

しかし、それは従来のような、外部から見えやすい場所に祭壇を作っていないだけであり、（無論、筆者は減少傾向にあるとの推察をしているが）決して祭壇そのものが無くなっている訳ではないのである。

さてここで、先行研究に目を配ると、道教系のフィールドワークは、特に日本においては、西洋に比して若干立ち遅れていると指摘されているものの、全く存在しな

いわけでもない。しかしながら、後に廟の発展過程において述べるように、十分に歴史があり、かつ発展した、いわゆる大廟および大廟にて執り行なわれる儀礼を対象としたものが多く、それらの大廟群がどのように成立していったのか、特に発展の初期段階を調査したものは見られない<sup>(注4)</sup>。

調査・研究の対象が大廟を中心としているのは、その影響力等を考慮すれば妥当な選択であり、それらの研究に対して異議を唱えるものではない。しかし、影響力を及ぼすに至るまでの廟の発展に関して、その過程について焦点を当てることも、また必要なのではないだろうか。ただし、その発展過程も様々なケースが存在するため、本稿もまた特定のケースを切り取った論述となることは否めないのだが、ごく初期の段階として、比較的多く見られるものとして家庭の祭壇が挙げられるだろう。本稿ではこの家庭の祭壇に焦点を当てて、住環境の変化に伴う道教系の祭壇の発展に迫っていきたい。なお、本稿では、台湾南部、特に筆者の居住する小港区（中原地区中央）、先に調査した鳳山区紅毛港の例を中心に<sup>(注5)</sup>、都市部における住環境の変化による道教系祭壇の変化について少しく述べたい。

## 二、家庭内における祭壇の伝統的な発展

それではまず、現代との比較のために伝統的な祭壇から述べていきたい。多くの宗教でそうであるように、特に個人の場合は、突如として巨大な祭壇が築きあげられるものではない<sup>(注6)</sup>。通常は、簡素な祭壇から徐々に立派なものとなり、祭壇が独立して廟等の宗教専用施設となり、その宗教施設が時を経て次第に大型化していくものである。簡潔に示すならば、以下の通りとなるう。

簡素な祭壇 ↓ 私人壇や小さな祠 ↓

小廟 ↓ 中廟 ↓ 大廟

個々のケースにより若干の違いはあるにせよ、概ねこの拡大の過程をとる<sup>(注7)</sup>。

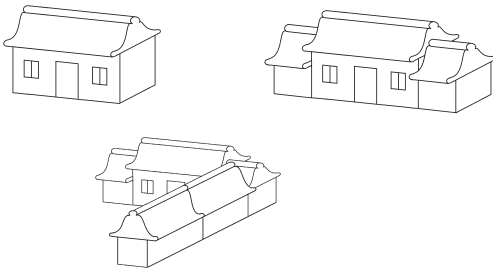
なお、「私人壇」とは、祭壇が公共性を帯びない、個人（一族）の廟のことであり、現地では「私人神壇」「家族廟」とも呼ばれている。名称からも想像できるように、基本的には小規模のものが多いのだが、一族の資産状況によっては、いわゆる普通の小さな廟よりも壮麗なものが作られることもある。そのため、規模による線

引きがやや難しい。本稿では外部の参拝者に公開しているかどうかを一つの判断基準とし、比較的小規模かつ外部に公開していないものを私人壇と表現している<sup>(注8)</sup>。

また、「小さな祠」とは、廟と呼ぶにはあまりにも簡素ではあるが、外部に公開、つまり公共化している極めて小規模な建築物を指している<sup>(注9)</sup>。

さて、これらの「簡素な祭壇から大廟」へ発展する過程は、住環境の変化とかなり密接な関係がある。以降、図を使いながら解説したい<sup>(注10)</sup>。

図Aの小さな家屋には、巨大な祭壇を設けることは空間的に不可能であるため、通常は、日本の神棚のように天井付近に板等を用いて専用の空間を増設したり、扉の無い食器棚のような洋間用の仏壇状のもの（神明桌、あるいは神桌と呼ばれる）が部屋の間隙に置かれるに止まる。祭壇の



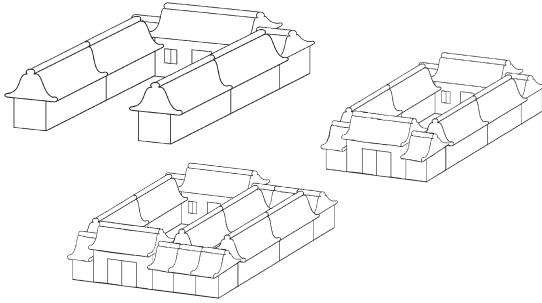
図A

ある空間と生活空間が混在しており、祀られる神明（神様）の絵・牌位・像（神像）、あるいはそれら神像類を収めた小型の神龕が一つ。そこに祖霊用（祖先牌位、公媽龕、祖龕）が加わるといのが典型的な状態である。

図Bのように三合院や四合院となり、さらに護龍まで作られる頃には、部屋数（空間）に余裕が出てくるため、多くの場合は正身（大厝身、正堂）の中央に、常設

の供物台（頂桌や下桌）等が置かれ、宗教的な装飾品も揃えられ、部屋全体が祭壇専用の空間へと変化していく。

この頃になると祀られている神明の数も、三から五程度に増え（龍目）、さらに祖霊用の祭壇が別途設けられる（龍目）。なお、現在ではこの規模（発展段階）のものから私人壇と呼ばれることが多い。

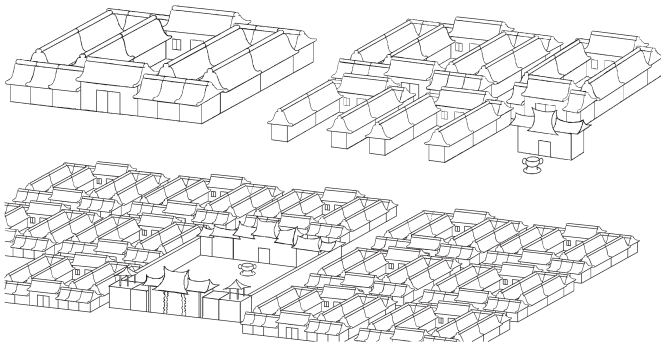


図B

図Cは、さらに家屋が巨大化した（多護龍合院、あるいは二進院・三進院等）状態であり、ここまでくると、家族が住んでいる家というよりは、一族が住んでいる集落と言う方が実態に近いだろうか。

この頃から、屋内にあった祭壇が、独立した施設として別に建築され始める。なお、図Bの段階で独立した建築物になることもあるが、この場合は、資金的な理由から比較的小規模かつ簡素な建築物（本稿の「小さな祠」に相当）になりやすい。

なお、現在ではあくまで推測の域を出ないが、独立した建築物を作る



図C

理由は、信仰心の発露や、一族の勢力誇示とは別に、保  
安上の問題があると思われる。図Bの三合院や四合院内  
にて、関係者のほとんどが居住している場合、中庭にて  
儀式の一切を執り行うのが、経済的にも、諸々の準備の  
都合からも効率がよい。しかし、複数の住居、時には集  
落の外にまで一族が分散するような場合、参加者の人数  
に対して、純粹に敷地面積が不足する。また日常的な参  
拝に対応する、宗家の負担も増加し、参拝者の身元確認  
にも難が生じ始める。結果として、保安（居住区域への  
不審者の侵入防止）上も限界を迎えてしまうのではない  
かと思われる。

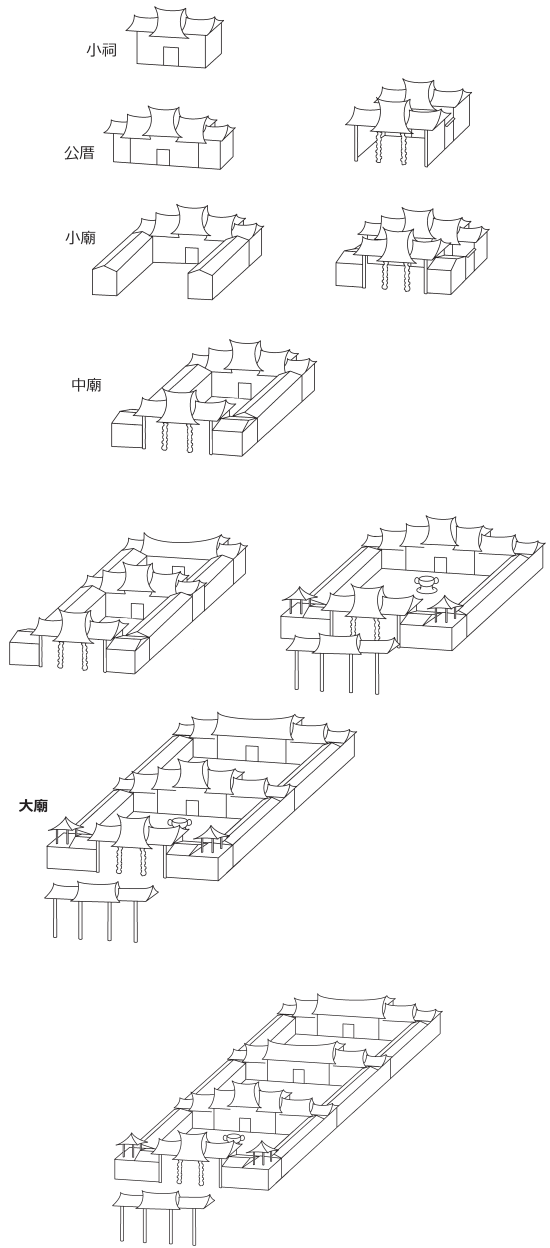
祭壇に目を配ると、移築を機に、祀る神明を増やして  
陣容を整えることが多く、比較的少ない場合でも、三つ  
程度は祀られる。また、神像自体も大型の物になり、威  
厳のある空間を演出するようになる。ただし、一族がど  
れほど勢力を誇ろうとも、必ず独立した建物にするとい  
うわけでもなく、また、専用の施設を建てたとしても、  
祖霊用の祭壇に関しては、住居内に置かれ続けることも  
多い<sup>（注13）</sup>。

なお、独立した建築物になると、創廟した一族とは無  
関係な人々の、常習的な参拝が発生し、公共化が始まる。  
図Dは、独立した宗教施設の拡大の様子である。それ

ぞれ左側の絵は、劉枝萬氏の述べる廟の拡大過程を図式  
化したものであり、右側はそれとは別のパターンであ  
る。図の上部は住居の時期としては、図B期の発展し  
きつた頃、または図C期の初期の頃となる。大きくなっ  
ていくにつれ、創廟した一族とは無関係の信者（単なる  
外部の参拝者ではなく、仲間として認識される他人）も  
加わりだし、公共性がより強くなる。以降、住居の拡大  
と類似した宗教建築物の拡大（増改築）、および祀られ  
る神明数の増加を伴いながら、巨大化していく。

以上が、住居の拡大、および廟の設立（独立）から廟  
が巨大化していく伝統的な過程である。

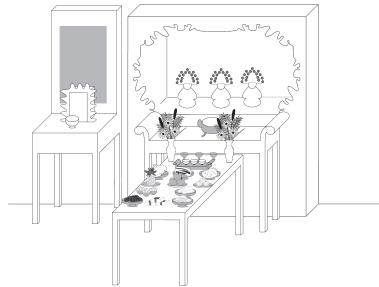
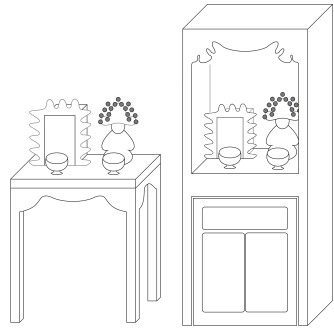
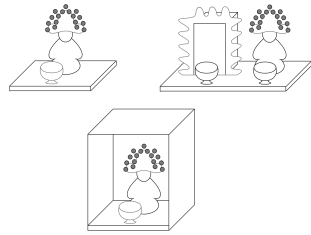
なお、元々家庭で祀られていた神明とは別の神も存在  
するので、言及しておきたい。それは外来、あるいは異  
質の存在である。その地域にて、身元不明の変死者（行  
き倒れ）の類が出た場合、供養のために専用の廟に祀る  
のだが、有力者が独立した建造物を立てて祀ることがあ  
る。紅毛港の例で言うならば、前者が海難者を祀る海衆  
廟であり、後者は正軍堂や保安堂である。ただし、独立  
した建造物となっても、自分達にとって本来無関係な存  
在であるため、通常は小規模なものに止まり、それ以降  
の拡大が起きることはない。しかし、保安堂のように、  
その後、何らかの奇跡（靈験）が生じた場合、信者群が



図D

発生、拡大していく<sup>(注1)</sup>。その他、天啓を受け廟を設立するなどのパターンもあるが、本稿では割愛する。元々家庭で祀られていた神は、一族の隆盛と共に、特別な奇跡がなくとも拡大の過程を歩むのだが、外来の存在に関しては、創廟者(一族)の経済的成功とは別に、奇跡といった特別な要因が必要となる点で異なる。では、再び祭壇だけに注目した場合はどうであろう

か。日本で言う神棚状のものが、仏壇状のものとなり、さらに常設の供物台等が設置され、「専用の空間」となる。そして次は空間つまり部屋だけではなく「建物全体が専用」のものへと拡大し、「外部の参拝者を受け入れる」ようになる。そして建物の拡大に伴い祭壇もまた巨大化していく。図で示すならば以下の通りである(図E)。このように拡大していくのであるが、物質的あるいは



図E

見ていきたい。

なぜ都市部に限定するか  
 といえば、郊外では、余剰  
 地の余裕が比較的あるた  
 め、住居こそ伝統的な家屋  
 ではないものの、「簡素な  
 祭壇から大廟」へ発展する  
 過程は、伝統的なものと類  
 似しているからである。

面積的な拡大だけではなく、「専用」と「外部の人間」という二つの要素が存在していることに気付く。「専用」とは、日常空間からの独立であり、「外部の参拝者」とは、「私」から「公」への変化と捉えることができるだろう。ただ大きく煌びやかになっているだけではないのである<sup>(注15)</sup>。

### 三、二〇一〇年代の都市部における祭壇

前章では、伝統的な発展過程を見ていったが、ここからは現代（二〇一〇年代）の都市部における発展の過程を

化（結果としての西洋化）ではある。しかし、例えば、  
 献灯の類は、現在、本物のろうそくから小型の電球（白  
 熱球）へ、その白熱球がさらにLEDへと変化してい  
 る。本物か偽物（代用品）かの違い、また利用されてい  
 る科学技術レベルの高低はあれども、献灯という宗教的  
 行為が行なわれ続けている点では同じなのである。技術  
 の進歩による、表面的な変化だけにとらわれるべきでは  
 ないだろう。

さて、その一方で都市部では、家屋の様式以前の問題  
 として、既存の建築物を平面的に増築する敷地の余裕  
 が、もはや存在していない。以降、都市部における状況



を戸建て(注16)とマンションの場合に分けて述べていきたい。

### 戸建ての場合

二〇一七年の現在では、図Fのように、隙間なく建てられた棟続きの長屋型の、三〜四階建ての住居へと変化している。一軒あたりの間口は四メートル前後から、奥行きは十メートル前後からと、奥行きのある細長い住居であり、一階から最上階までを所有する。伝統的な建築様式であれば、二塚店、三塚店(図Fの場合は五塚店以上)といった呼称であろうが、ビル型のセメント系の現代建築では、その呼称がふさわしいかは疑問である。いずれにせよ、増築するとすれば、四合院のように平面的に広がるのではなく、垂直の上に伸ばすしかない。図Fは本来、四階建ての住居群なのだが、手前は五階に相当する一階分を、二件隣の棟に至っては二階分を強引に増築している。

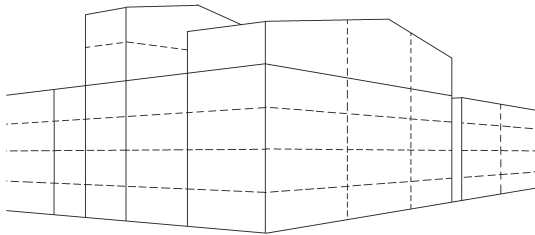
また、一階部分は、道路に面する入口手前の数メートルがアーケードになっていることもあれば、完全に家屋(屋内)となっていることもある。また、その屋内も、車庫であったり、リビングであったりと用途は様々である。同一の建築会社が区画単位で建て売りするため、そ

の地域ごとに比較的同一の構造になる傾向はあるのだが、最終的には、家主の好みで屋内改装を行ない、自由に使っているのが現状である(注17)。

それではこのような住居の場合、その祭壇はどのようなものであるか。実は、初期の場合においては、伝統的な発達とさほど異なるものではない。なぜならば、居住空間と生活空間が混在する時期は、適当な部屋、多くは一階ないしは最上階の道路側の部屋であるのだが(注18)、

その部屋内で、神棚状、仏壇状と変化していくだけであり、内装や家具が西洋風であることを除けば、基本的には同じだからである。

また、専用空間が必要な私人壇についても同様で、一部屋を完全に祭壇用として確保してしまえばよいのであり、郊外の住居に比べ拡張性に乏しいとはいえず、もともとの部屋数が多いため、家主の資金力と意思次



図F

第で如何様にもなる。一フロア二部屋なら、図Fのケースでは増築部分を含めずとも八部屋、一フロア三部屋なら十二部屋あることになる。戸建ての場合、親族（両親・兄夫婦・弟夫婦等）で住むケースが多いため、部屋が余るということも少ないと思われるが、一部屋を祭壇用に空けることは比較的容易である。どうしても部屋数が不足するなら、上に一層増築すれば良いだけである。

このような状況なので、むしろ仏壇状から私人壇への移行（拡大）は、簡単とも言えるだろう。実際に、荘厳な祭壇に数々の宗教用品が揃えられ、若干無理やりな改装ではあるが、藻井（中国古建築によく見られる装飾的な天井）まで作りこまれた私人壇というものを街中で見ることがができる。

さて、その一方で、私人壇以降の拡大というのは、なかなか困難なようである。新廟の建立というものはまず見られない。新廟の建立を考えるならば、街なかに余地はすでに存在していないため、郊外に廟建立のための土地を求めるしかないからである（注9）。しかし、それも廟の管理を考えるならば、現実的な選択とは言えず、信者の住居との距離を考えるならば、街なかにこだわらざるをえない。しかし、街なかにこだわるのであれば、

今度は、適当な土地が売りに出されるのを粘り強く待つか、一般家屋の外壁に廟風の装飾（屋根等）をかなり無理やりに取り付けて、「廟のようなもの」を作るくらいしか、選択肢が存在しない。

なお、土地の購入を考えるならば、図Fの住居を例にすると、高雄の（台湾第二都市、台北に比べ地価がかなり安い）、筆者の居住する小港区ですらも（高雄市の都市圏最南端）、一軒三千万NTD、日本円で約一億円である。台湾の大卒が二〜三万NTDの月給であることを考えると、日本の金銭的イメージで言うならば、大都市圏の最安値の地域ですら、住居とは別に、土地購入のためだけに三億円程度の資金を用意するようなものである（廟としての構造を考えるならば、実際にはさらに数倍の広さが必要である）。結果、ビルの中に挟まれた、なんとも不思議な廟もどきになってしまうのは仕方ないことなのかもしれない（注10）。従来状況に比べ、私人壇までは拡大しやすいものの、それ以降の拡大が止まりやすい状況とも言えよう。

#### マンションの場合

さて、先述のように、一般の人々にとって、都市部に戸建てを保有することは、住居としての最初の一軒で

すら困難な状況であり、現実的な値段としては分譲マンション一択となってしまふ。しかし、それも近年は価格の上昇が著しく、例えば小港区で四部屋の物件は、およそ七百万NTDである。日本の普通のサラリーマンが七千万円のマンションを購入するようなものであり、やはりあまり現実的ではない。実際には、2LDKや3DK程度を長期ローンで購入ということになる。

マンションの場合は、戸建てを保有する場合と異なり、核家族程度の人数で暮らす傾向があり、居住者の人数も少ないため、生活空間が不足しているわけではない。しかし、私人壇を持つ余裕のある部屋数でもなく、持ち家のように上に増築することも出来ないため、必然的に、神棚状か仏壇状の祭壇となってしまう。つまり、祭壇の発展という観点から見ると「私人壇にすら成長できない」状態と言えよう<sup>(注2)</sup>。

しかしながら、空間的な拡大が困難であるため、今度はその小さな祭壇をやや贅沢に作りこむということが起きている。例えば、神棚状の一枚板であってもその板に装飾を入れたり、装飾の入った厨子を壁に取り付け神像を安置する等、安価な神桌(仏壇状)よりも、高価なものが使われる傾向にある。

また、神桌(仏壇状)の場合でも、西洋風の内装に合

わせてモダンなデザインの神桌組(神桌と供物台のセット)にて、生活空間との調和を図ったり、使用しない時はコンパクトに収納できる神桌組、狭い空間で神明用と祖霊用とが上手く配置できる神桌等、限られた空間を手く使う工夫がなされているものが売られている。

#### 都市部における廟の発展

さて、それでは最後に、都市部における廟、すなわち独立した宗教専用施設の発展について少しく述べたい。先に記したように、主に土地(価格)の問題のため、新廟の建立というのはなかなか難しい。しかし、いくつかの偶然(創廟者の豊富な資金力と余剰地の発生)が重なれば、新廟の誕生も可能となる。また、以前から建っている廟もあり、廟自体は都市部といえども存在している。では、それらの廟はどのように発展しているのか。

一言で言うならばビル化である。ビルと言っても長方形主体のオフィスビルとはやや異なり、廟風の外観を保ったまま高層化している。

伝統的な廟であれば、山門をくぐり、三川殿を抜け、正殿、後殿、その他の祭壇へと参拝していくのだが(図G参照)、平面的に拡張することが出来ない以上、立体化していくことになる。

例えば一階の入口部分を三川殿風に作り、屋内の前分（道路側を基準）を正殿とし、後ろ半分は礼堂（多目的ホール）、二階の前面部の左右に鼓楼と鐘楼を擬したものを作り、中央部に後殿、後ろを事務室という具合にある（注22）。

さらに巨大化させるならば、三階の前面部に大歳殿や文昌殿といった本来であれば（やや小さめの）別棟になるようなものを左右に配置し、三階の後方を（やや大き目の）別棟になる観音殿や弥勒殿にする等、その廟の主祀神等の関係で、一定しているわけではないが、立体的に組み合わせることで拡張している（図H参照）。

#### 四、おわりに

本稿では、台湾の家庭における道教系祭壇の、現代（二〇一〇年代）の都市部における変化について述べた。本稿の調査によって分かったことを簡潔に記すならば以下となる。

第二章では、伝統的な住居における発

展、および住居の発展に伴う祭壇の変化（拡大）を述べた。例外はあるものの、神棚状から仏壇状へと変化し、さらに私人壇として宗教専用の空間へと変化する。さらに、部屋だけではなく、建物自体が独立し、時代とともにその宗教専用施設が拡大していた。

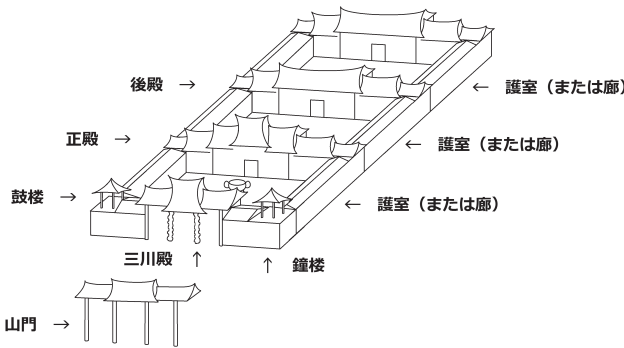
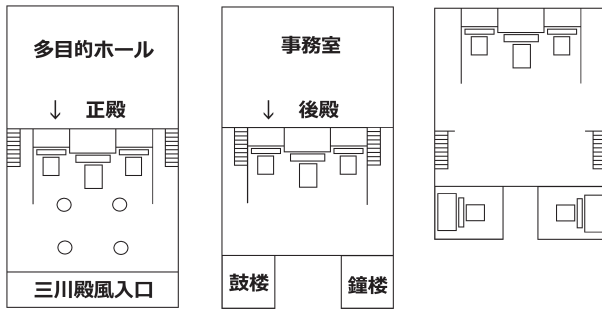


図 G



1階

2階

3階

図 H

第三章では、現代（二〇一〇年代）の都市部における住環境と、祭壇との変化を述べた。その際、一戸建て相当とマンションの場合に分け、一戸建てでは私人壇までで発展が止まりやすいこと、マンションでは私人壇にすら発展せず、つまり神棚・仏壇状で発展が止まる傾向があることを述べた。さらに、現代における廟が、都市部では、従来のような平面的な拡大ではなく、立体的に拡大していることを述べた。

第二章で述べた内容は、中国文化、とりわけ中華建築に関する資料ですでに言及されていることではあるのだが、祭壇の拡張との関連性をもたせて、図等を使い解説しているものは、多くないように思われる。また、従来の研究では「無廟」として、一括りに説明されていた状態のものに、いくつかの段階（神棚状、仏壇状、廟化していない・独立した建造物になっていない私人壇）が存在していることを指摘できたとと思われる。第三章で取り上げた、現代における状況の解説はさらに少なく、一定の価値を有するものと考えている。

ただし、本稿は、同時代資料を後世に残すという意識の下で執筆していることもあり、記録と簡単な分析を主とし、例えば文化論のようなものを論じるに至っていない。従来の研究ではあまり問題にされなかった部分を記

録した意味においては、フィールドワーカーとして、一定の価値を有する資料を提示したという自負はあるのだが、あくまで調査報告の域を出ておらず、今後の課題であると痛感している。諸先生方の御批正を仰ぎたい。

## 注

(1) ほとんどの日本人が、本人の意思とは無関係に、どこかの檀家（仏教）や氏子（神道）となっており、あるいは特定の檀家や氏子でなくとも（書類上は無所属であっても）、それらの伝統的な宗教の儀式に則って冠婚葬祭等を執り行ない続けているのと状況は同じである。

なお、本稿は台湾の事例であり、ここで言う道教とは「道教系の民間信仰」であり、高橋晋一氏の区分（儒教系祠廟、仏教系祠廟、道教系祠廟、民間信仰系祠廟、新宗教系祠廟）に従うならば、「民間信仰系祠廟」に相当する。

高橋晋一「祠廟の祭祀と道教」（『講座道教五 道教と中国社会』、二〇〇一年、一八六―一八七頁）

(2) 正確には「紅磚民居」と表記するべきと思われるが、建材や細部の装飾の類を除き、主要な形式、及び拡大の様相は北京四合院に類似しているため、一般に理解されやすい四合院の名称を用いる。

(3) 本文では「都市部」では「ほぼ壊滅」としているが、二〇一七年三月に地下鉄小港駅より徒歩圏内の場所に、家屋の構造、祭壇の配置等、正しく典型的な三合院（観光地ではなく完全な民家として現在も居住）の存在を確認した。きわめて希なケースと考えられるが、二〇一七年頃の都市圏にまだ存在していた例として、後世のための資料として記録しておくたい。

(4) 廟の大小や、その廟を支える地域共同体の大小はあれど、すでに廟として存在し、信者層が形成された状態のものを対象としている。

(5) 前川正名「鳳山区紅毛港保安堂について」（『中国研究集刊』六〇、二〇一五年）

前川正名「鳳山区紅毛港新廟群調査」（『中国研究集刊』六一、二〇一五年）

(6) 寒村でありながら、立派な宗教設備を備えていることもあるが、いくら貧しくとも、村全体で宗教設備を保有するまでに特定の宗教勢力が拡大しているのであり、全体の資金力としては決して小さいものではない。

(7) 劉枝萬氏は、廟の発展に関して、「無廟」「草寮」「小祠」「公厝」「小廟」「中廟」「大廟」の七段階に分けている。本稿では分かりやすく、「無廟」を「簡素な祭壇」「私人壇」、「草寮」「小祠」を「小さな祠」、「公厝」「小廟」をまとめて「小廟」

とし、五段階で示す。

劉枝萬「廟寺の成長」（『台湾の道教と民間信仰』風響社、一九九四年、二二八―二三二頁）

(8) 具体的には「軒先に扁額や提灯がある」、「祭壇前に常設の供物台や大型の香炉がある」、「礼拝空間が一部屋ないしは全体を占有し、居住空間とは隔離されている」、「しかしながら、家族あるいは親族以外の参拝を想定していない」等が挙げられる。従って、道士の自宅の祭壇や、靈能者等の祭壇は、本稿の指す私人壇とは異なるものである。

(9) 公共化の一つの目安として、公衆トイレの有無があげられる。公共化している場合、不特定多数の参拝者が訪れるため、トイレ等を含む外部からの訪問者に対応した設備が整えられる。

(10) 本稿では、筆者が描いたイラストを使用している。これは本稿の性質上、調査対象が個人宅のプライベートな祭壇の類であることが多く、個人情報保護等を勘案した上での判断である。

なお、図作製の際、筆者が撮り溜めた写真の他、王其鈞『図解中国民居』（楓書房、二〇一五年）、康銘錫『台湾古建築裝飾深度導覽』（第三版、猫頭鷹出版、二〇一五年）、康銘錫『台湾廟宇深度導覽図鑑』（第二版、猫頭鷹出版、二〇一四年）、李乾朗『台湾古建築図解事典』（遠流出版、二〇〇三年）を参考にした。

(11) 典型的なパターンはあるものの、どの神明を、どれだけの数の神明を祀るかは個々の場合による。ただし、資金や空間上の問題から、一般的にはあまりに多数の神像を置くことはない。

(12) 祖霊用の祭壇の机も神桌なのだが、祖先桌、公媽桌として区別して販売している例が見られる。神桌は、神明用、祖霊用を問わずサイズの適合する普通の机に、布等を掛けて神桌にしていることも多く、また、専用机はそもそも基本的に特注品の部類であるため、廟や神明の名前を彫り込んだり、好みの装飾がある程度注文できる等、個々のカスタマイズに対応している。

(13) 住居とは別に建てた祭壇専用施設（つまり廟）に、祖霊用の祭壇をも移転する場合や、神明用の建物とは別に祖霊専用の建物を建てる場合等、いくつかのパターンが存在する。例えば、濟天宮（紅毛港）は廟内の小部屋に祖霊用の祭壇を設置し、朝天宮（紅毛港）は同一敷地内だが、敷地内への入口をも別にした祖霊用の建造物を、完全に別に作っている。

(14) 福安宮（嘉義県東石郷）の義愛公、鎮安堂（台南市安南区）の飛虎將軍等も信者を獲得し拡大した例である。

(15) 広大な敷地と資金力とを有する人物が、自室に壮麗な祭壇を作ったとしても、それはあくまで、その個人の豪華な祭壇であるに過ぎない。同様に、基本的には部外者の来ない場所、

例えば中庭に、近隣の大廟を圧倒する、壮麗な専用建築物を建てたとしても、やはり私人壇でしかないのである。なお、この「豪華な私人壇」に公衆トイレが設置されることはあるだろうか。

(16) 台湾の都市部における、日本の戸建て住居に相当する建物には、長屋形式で建築分譲されるものがほとんどで、透天厝などの名称で知られている。本稿ではこの透天厝を戸建て（單位・一軒）と呼び説明を行なう。

(17) 統治時代では、アーケード付き長屋型建造物に「亭仔脚」の名称もあるのだが、現在では必ずしもアーケードを作るわけでもなく、そのため本稿ではこの名称を避けている。参考・茂木計一郎「騎樓型民居の構成に関する研究（梗概）」（『住宅総合財団研究年報』一八、一九九二年）

(18) 台湾の場合、耐力壁・柱・梁の配置等を除き、内装を購入者が施工する例が多いため、必ずしも一定しているわけではないが、最上階の窓側を、あらかじめ祭壇用の部屋として作ることが多い。ただし、祭壇が大型化する場合、什器や祭具の搬入および設置を考えると一階の道路側となりやすい。（口径六〇センチ程度の香炉で二〇〇キロ前後の重量である。）

なお、一般の住居に立ち入ることも困難なため、調査不足の感も否めず、奥の部屋に祭壇を設けている可能性も完全には否定できない。ただし、筆者は中層階の道路側に私人壇を



作っている例をまだ見たことがなく、中層階や奥の部屋の祭壇というのは存在していたとしても少数例と思われる。

(19) 新興の宗教勢力が、大規模な本部(本山)を作る場合、資金的には潤沢であったとしても、郊外の山の中腹等に開く場合が多いのは、宗教的な何か、例えば静寂さや、霊妙な雰囲気を求めてだけのことではないと思われる。

(20) 一見すると、廟のようにも見えるのだが、外装が廟風に変化しているものの、一階の道路側の部屋に祭壇があるだけで、一階の奥の部屋、および二階以上には家族が暮らしているという、私人壇と変わらない状況であることがかなり多い。

(21) 核家族化の影響と関係することとして、本家ではなく分家、男性ではなく女性当主(世帯主)等、そもそも大型化させる必要がない(信仰上の共同体に対する社会的な責任がない)事例もあり、敷地の問題だけではない。しかし、本家筋の直系男子が街なかのマンションにて居住している場合、自宅の祭壇の拡張に難があるのは明らかである。

(22) ビル化の具体例としては、至陽宮(小港区)、慈鳳宮(屏東駅前)、が挙げられる。紅毛港の場合は、都市圏でありながら、集団移住により区画整理を最初からやり直した状態で建設しているため、比較的廟の敷地に余裕があるのだが、それでも大廟に属し、敷地の広い朝天宮(紅毛港)、朝鳳寺(紅毛港)、飛鳳寺(紅毛港)は、一階を事務室やホール、二階を正殿に

しており、大廟の部類ではやや小ぶりの天龍宮(紅毛港)や、中型の城隍廟(紅毛港)、海衆廟(紅毛港)等も一階を倉庫や事務室、二階を正殿にする等、多層化している。